

◆『戦史秘話』第四話◆

日本オーストリア友好 150 周年 — 陸海軍交流の歴史と友情の絆 —

日本とオーストリアの防衛交流

今回の戦史秘話では、巷間ほとんど取り上げられることのない、日本とオーストリアの陸海軍の交流の歴史に光をあてます。こういった2国間の歴史を振り返ったオーストリア人と日本人の間で生まれた、友情の絆についてご紹介したいと思います。

2019年は、日本とオーストリアの国交樹立150周年にあたり、多方面において記念行事が開催されています。昨年7月には、河野太郎外務大臣(現、防衛大臣)がオーストリアのウィーンにおいて、カリン・クナイスル・オーストリア共和国・統合・外務担当大臣と会談し、日本オーストリア友好150周年に向け、政治、経済、文化等幅広い分野で二国間関係を強化していくことなどについて会談が行われました。

私たちの生活において、身近なところに、オーストリア発祥の文化、芸術、音楽あるいは「食」といった多くのことが浸透しており、日常生活に溶け込んでいるように思えます。澄み切ったアルプス山脈の景色、シェーンブルン宮殿などの建築物、モーツァルトやウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の音楽、ウィーン少年合唱団の清らかな声、有名なチョコレート菓子など。ところが、日本とオーストリア間の防衛交流の歴史は、今まで語られることはありませんでした。

フェルディナント親王の日本訪問

第1次世界大戦の引き金になったサラエボ事件で暗殺されたオーストリア＝ハンガリー帝国の帝位後継者であったフランツ・フェルディナント大公は、1893(明治26)年8月に日本を訪問していました。巡洋艦「皇女 エリザベート」で、世界一周の途上、日本を訪問されたのですが、最初に入港した長崎港では、日本海軍の軍艦「八重山」が出迎えの大任を引き受けました。【後掲史料①】史料中の「帝国軍艦」は、日本海軍軍艦「八重山」を示します。「奥国親王殿下地方御遊覧日割」という史料には、フェルディナント大公の行動の概要が記録されています。

その後、フェルディナント大公は長崎から、熊本、巖島、岡山、京都、大阪、奈良、大津、岐阜、名古屋、箱根等を訪問、8月17日東京に到着し、午後12時30分に宮中へ参内

されました。8月19日には、フェルディナント大公のために青山練兵場において日本陸軍による観兵式が挙行されました。フェルディナント大公は、その日の午後、日本訪問の間に受けた優遇に対し、謝辞を奏上され、天皇陛下に告別の挨拶をされました。その際、明治天皇から日本軍で使用していた村田銃を一丁、記念としてフェルディナント大公に贈呈しました。この際、宮内大臣から陸軍大臣に、村田銃一丁を早急に準備するよう照会した文書が、防衛研究所戦史研究センターの史料として残されています。【後掲史料②】

その後、フェルディナント大公は、8月22日横浜港を出発し、米国を經由して帰国されました。記念品として贈呈された村田銃は、その後、所在不明となっていました。2014(平成26)年1月、オーストリア陸軍のペッヒャー准将により、ウィーン市内の博物館の地下倉庫で木製の化粧箱に入った状態で無傷で見つかったのです。このペッヒャー氏が今回、紹介する友情の絆の一人です。もう一人は、陸上自衛隊OBの富樫勝行氏です。富樫氏は1997(平成9)年から2000(平成12)年までの間、在オーストリア日本大使館に防衛駐在官として勤務した経験を持っています。富樫氏がオーストリアにおいて勤務していた際、日本軍の歴史に興味を持っていたペッヒャー氏と出会ったことが、日澳防衛交流の歴史を著書として記録に残す、きっかけとなったのです。

スキーを日本に伝えたレルヒ少佐

ところで、日本におけるスキーは明治時代にオーストリアから伝えられたことは、豪雪の地では有名な話です。オーストリア陸軍のテオドール・エドラー・フォン・レルヒ少佐により、新潟県上越市に駐屯していた日本陸軍に伝えられました。1910(明治43)年に来日したレルヒ少佐(日本滞在中に中佐に昇任)は、日露戦争における日本軍の勝因を分析するために来日したのですが、歩兵第58連隊において隊附勤務し、その傍らスキーの技術指導を行いました。

当時の歩兵第58連隊長が、レルヒ中佐の日本陸軍における勤務振りを評価し「外国武官成績報告の件」という報告書を陸軍大臣宛てに提出しています。多方面にわたり評価していますが、スキー術の教育に関する評価は、「我が国スキー術歴史上に於ける鼻祖として降雪地方に与えたる恩恵頗る大なりとす」といったものでした。【後掲史料③】翌年1912年には旭川に駐屯していた第7師団長の要請で隷下の砲兵連隊に招かれスキー訓練を実施しました。

防衛交流を記録した二人の友情

先に述べたお二人の交流ですが、富樫氏が日本に帰国してからも続き、ペッヒャー氏は富樫氏が勤務している部隊を訪問しました。2009年には第2師団(旭川駐屯地)を訪問、2013年には第12旅団(相馬原・高田駐屯地)を訪問し、交友を深め日澳間で行われた防衛交流に関する情報を相互に調べました。日澳友好150周年を迎えた2019年6月、お二人の共著である『日澳防衛交流150年 記念誌』が刊行されることとなったのです。この著書には、ドイツ語と日本語で、日澳間における防衛交流150年の歴史が記録されています。

2019年、日本国内では日澳友好150周年として各方面で記念行事が開催されています。上野公園にある国立西洋美術館では、600年にわたる帝国コレクションの歴史を紹介する「ハプスブルク展」が開催され、「日本オーストリア友好150周年」の記念切手が発行されています。この機に、ペッヒャー氏は来日し、12月5日(木)在日本オーストリア大使館において「日澳防衛交流150年」と題して講演を実施しました。もちろん、富樫OBも講演のお手伝いで同行しました。同様の演題にて、防衛研究所において研究会を実施し、お二人から「日澳防衛交流150年」についてお話を伺うことができました。

研究会の様子(2019年12月5日(木)防衛研究所において)



(左:ペッヒャー准将、右:富樫氏)

コラム◆日本陸海軍における駐在武官

日本の在外大・公使館付武官は、1875（明治 8）年 2 月に在清公使館付陸軍武官が任命されたのが始まりである。同じ年の 3 月には在ドイツ公使館付陸軍武官が任命された。海軍は陸軍に遅れること 5 年余り、1880 年 11 月に在ロシア公使館付武官が、翌 12 月には在英公使館付武官が任命された。こうして産声を上げた日本の在外大・公使館付武官制度であるが、定着には陸・海軍とも数年を要した。20 世紀に入っても在外大・公使館付武官の駐在先は増加するが、同時に派遣が終了するケースや一時的に中断するケース、あるいは一人の武官が他国の武官を兼務するケースが出てくる。

大・公使館付武官は軍人であると同時に、外交官でもあった。外交官旅券を所持し、大・公使館員名簿（外交官名簿）に名前が記載され、外交特権が付与された。通常、外国に駐在する軍人で、このような地位を与えられたのは、大・公使館付武官と同補佐官のみであった。

日本とオーストリア間における大・公使館付武官の配置は、ウィーンに派遣された日本陸海軍の軍人は、戦前で 24 名である。戦後、自衛隊においては現在の防衛駐在官を含め 9 名である。オーストリアから日本に派遣された人数は多くなく、戦前でわずか 3 名、戦後は兼轄を含め 7 名である。

（参考文献：立川京一「我が国の戦前の駐在武官制度」『防衛研究所紀要』第 17 巻第 1 号（2014 年 10 月）123 頁－159 頁ほか）

後掲資料

① 明治26年 公文備考 官職儀制檢閲卷1 儀制(3)

レファレンスコード: C06090977500

0254

澳國親王殿下地方御遊覽日割

八月二日 (水曜) 午後七時長崎御着艦

八月三日 (木曜) 午前八時五分接伴員其他御受 午後訪公園一覽

八月四日 (金曜) 艦中一泊

八月五日 (土曜) 午前七時頃長崎發 (帝國軍艦) 艦中午餐

八月六日 (日曜) 正午十二時三角港着艦 午後五時半頃熊本着 一日亭泊

0255

八月五日 (土曜) 午前熊本城水雨寺一覽 一日亭午餐

午後一時十分熊本發 (臨時汽車) 午後七時五分門司着 馬関風月樓一泊

八月六日 (日曜) 午前七時半頃馬関發 (帝國軍艦) 艦中午餐

午後八時頃嚴島着 同所紅葉谷岩村平助方泊

八月七日 (月曜) 午前九時頃嚴島發艦 (帝國軍艦)

② 壹大日記(明治26年9月)「澳國親王殿下へ御贈進の村田連發銃の件」

レファレンスコード: C03030803000

0425

陸軍大臣伯密尉大山巖殿

官内大臣子密尉土方久元

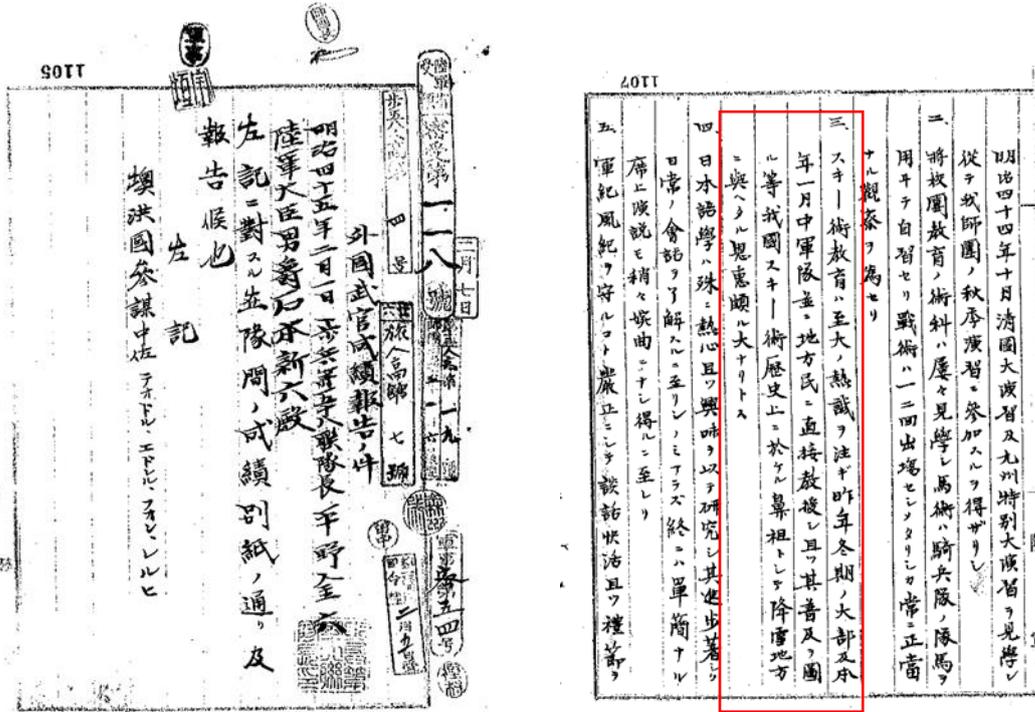
明治二十六年八月十日

今般來航、澳國フランツ、フェルチナンド親王殿下へ村田連發銃一挺 天皇陛下より御贈進可被遊 御沙汰ニ付早急銃彈取揃當省(御差廻)相成度此段及御照會俟也

陸軍省第一五五號

五月廿八日 陸軍大臣

③ 密大日記 3冊の内 3 明治 45 年 大正 1 年「第 13 師団 壕洪国武官隊附成績の件」レファレンスコード: C03022314200



(戦史研究センター戦史研究室所員 石丸安蔵)